

体験 3類×3要素

類(1 表出と環境 類(2 フィールド 類(3 しあわせ

(1-1) 初めて (1-2) 繰り返す (1-3) 日々の暮らし

ぶらんこはいつから乗れるようになるのだろうか。早い子どもは、2歳を待たずして乗れるようになる。しかし、初めは自分で乗るのではない。乗せてもらうのだ。「乗る」が先で「降りる」が後だ。

初めて乗ったそのとき、子どもは感動するのだろうか。

乗りたいと思い、近くのおとなに頼み、乗せてもらう。うれしいという気持ちがわくかもしれないし、うれしい気持ちはなく、ぶらんこ座面の感触や揺れる感触をさぐるほうが先行するかもしれない。果たして「感動」という言葉対応はふさわしいのだろうか。

あかちゃんがお母さんのおなかから出たその瞬間、あかちゃん自身にとって「感動」だろうか。「体験」といえるのだろうか。感動や体験といえるものはいつから始まるのだろうか。ぶらんこに初めて乗ったそのときを「体験」としてよいと思うし、感動またはそれに類するものが生じるのではと思う。

繰り返す体験の始まり

一度でも「乗せてもらう」と、それからはぶらんこを目にしたとき、再び乗りたいとせがむように

なる。これは、〈繰り返す体験〉を意味する。つまり、繰り返す前の初回があるわけだ。したがって、2歳児の感動とはどういうものかはわからないが、〈感動する体験〉をしていることになる。



幼児を含めて子どもを海辺に連れて行くと、渚に近づく。渚まで近づいて、ゆるされれば、足をつけたり、水をさわる。やがて「冷たい！」などの声が聞こえてくる。よく観察してほしい。足をつけたその瞬間、おとなでも同様だが、冷たいと発声するより前、言葉にならない感触を感じるはずだ。そのあとに、既知の言葉「冷たい！」が出てくる。冷たいが適切でないと思えば「気持ちいい」と言ったり、人それぞれになるだろう。つまり、初回は、言葉にならない。内言が発生し、外言を生じさせる。波が寄せては引く繰り返すを行うので、自身が動かずとも〈繰り返す体験〉がその場で起きる。〈繰り返す体験〉を経験すると新たな”ふれあい”を求めて前進することになる。

きょうと同じ日が、あすもまた来る。安定した「日々の暮らし」が「初めて」と「繰り返す」体験を支える。

体験 Stage				
乳児 間主観性	Stage	デビュー	冒険家	探検家
	対象	2歳半～	4歳～	5歳～小学2年
	幼児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
	フィールド	身近な周辺	定点(*)	移動(**)
心の発達	他者の発見	他者の理解	自己は 他者の存在で規定される ----- 「心の理論」	

生涯にわたる体験
目的と目標として計画

* 定点……年間を通して同じ場所で活動する
** 移動……定点に限らず移動も可

「野外」に出れば、そのすべてが「体験」になるとは限らない。3,4歳児を、好きに連れ出せば、子は「ついていく」だけとなる。活動のそれぞれに目的が明確である必要がある。これを主体性という。

5歳児からは「移動」が彼らの世界を拓げる援助となる。

点から線へ……3歳児の動きを〈点〉と表現すれば、4歳児は〈点〉でもあり〈線〉でもある。

5歳児——。探検家の集まりとみてよい。何かを見つけない。何かに出会いたい。もはや〈点〉ではなく〈線〉として認識できるようになり、移動することがこの年齢児の目的になる。〈世界観〉の始まりでそれは〈価値観〉の芽ばえでもある。語彙が豊かになり、さまざまな表現が可能でそれがおもしろい、楽しい(子ども自身が)。〈線〉になるとは、そういうことだと思う。複数の〈線〉から〈面〉や三次元・四次元となってゆくには、学齢になってからの学習を待つことになるのだろう。

類(1 表出と環境) 類(2 フィールド) 類(3 しあわせ)

学歴、身分、立場、あかちゃんからお年寄りまで、その区別なく、満足のゆく生きかたというものがあるのだろうか。「豊かさ」とは何かを問うかたちで考えてもみた。むずかしい話に、はまってしまう。他人事(ひとごと)のようになってしまう。



野外活動で5歳児と向き合うとき「やりたい」と思わせるようにもっていく。5歳児にもなると先入観をもっている。「にんげん」を5年もやってきているので、それなりに価値観が芽生えている。「やりたい」と思わせるには、自身の価値観にとらわれないように誘惑することが肝腎だ。価値観は固定観念ともいえるが、それをうちこわして“発見”を体験すると「やりたい」に辿りつく。

あかちゃんは、寝返りをし、やがて這い這いをする。動く自由を得ると「やりたい」ことに向かって進む。

若者に限らず、高齢になっても旅行が好きな人は、どこかへ行きたい。老眼になっても、本の好きな人は読書に時間を費やす。

高校3年生のとき、卒業前、さいごの授業で先生（漢文／田中稔先生）が言った。「好きなことを仕事にしないほうがいい。好きなことは自分用にとっておこう」と。それは「やりたい」ことは常にキープしておこう、という呼びかけだったのかもしれない。

しんしんと冷えているにもかかわらず、人気ラーメン店の前で列をなしている。お目当てのラーメンにありつけるには30分あるいはもっと時間がかかるのかもしれない。それでも「たべたい」。

毎朝、6時45分頃になると、朝食用にわたしはサラダをつくる。豆腐をボールに手で押しつぶして敷く。キャベツを丁寧に千切りにする。トマト、リンゴをきざむ。ラッキョと生姜をきざむ、隠し味でなかなかいい役割をする。浸しておいたワカメ、黒ごま。けっこうボリュームがある。パーフェクトに自己満足だが、この「たべたい」で一日が始まる。

お勤めでお昼のランチは「たべたい」というだけでなく、心安まるひとときだろう。野外活動を終え、足が園に向いている子らは「おなかすいたあ〜」と言う。

野外活動で焼きいもをすると「おいしい」。満たされて「たのしい」。ボランティア活動は「たのしい」とつづく。

一日が終わって入浴、シャワーの時間。ホッとする時間。「たのしい」というほどではないが、ホッとする時間は大切。

幼児は、一日を過不足なくエネルギーを消費するように終えたいと、わたしは思っている。幼児はいつまでもどこまでも遊ぼうとする。遊び過ぎると翌日に熱を出してしまうことがある。十分遊びきると、つまりエネルギーをつかいきると、「もう終わりにしよう」と声をかければ、あきらめて休むようになる。過不足なく過ごすことを身につけるのが幼児期の肝要だ。「たのしかったね！」

「やりたい、たべたい、たのしい」を《level of happiness : しあわせ三要素》と捉えてみた。

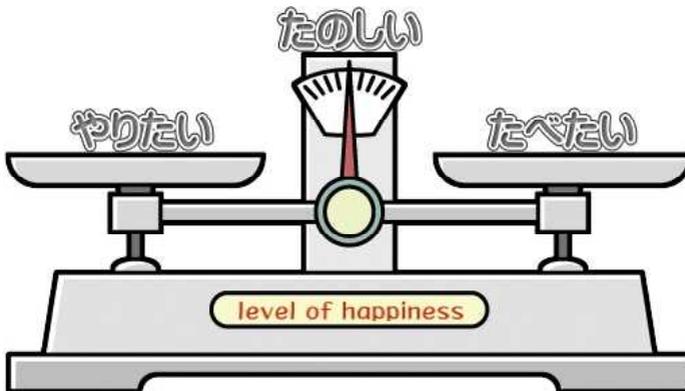


否定的に考えてみよう。

「やりたい」ことがない。やる気にならない、とは？ 幼児期にそれがあれば、先に述べた価値観へのこだわりが強いのか、もっと重大な心理的危機を問わねばならない事態か。ヴィゴツキーの学習理論〈発達最近接領域〉によれば「やりたい」ことが自身を突き動かしてくるのは自然なことだから。その「やりたい」ことがどれだけの起爆剤となるかは体験の積み重ねでしかない。それは成人しても同様である。〈いつまでも”子ども”〉は真理で、「子ども”の心”を外に出さないのが”おとな”という観念が勝っているにすぎない。

「たべたい」という気持ち、衝動はだれにもある。空腹状態は血糖値の異常な低下かもしれない。生きるために食べるだけでなく、好き嫌い個人の嗜好を含めて「たべたい」欲求は生きてきた証だろう。だから、「たべたい」が満たされるとしあわせな気分になる。共通の欲求だから共に食事をするともだちと時間を過ごせば「しあわせ」を共有することになる。

「たのしい」という価値を否定するとは、どういうことか。「たのしい」気分になれない。「しあわせ」を求めない。「しあわせ」でなくてもよい。小説やドラマのテーマになりやすいが、結果それは「しあわせ」を問うている。レジリエンス（立ち直り）は「やりたい」「たべたい」の復元力によるのだろう。



体験とは



資料通番23..ver.02 The Renaissance of Childhood 2024.4.13

体験 3類×3要素

山田利行

拡散歓迎 複写可（許諾無用）

<https://193pub.com/>